

カメルーン東南部の熱帯雨林地域に居住するバカの 2000 年代における土地利用の変化

－カカオ栽培と移住者の影響から－

北西 功一*

Change in Land Use of the Baka Living in the Tropical Rainforest Area of Southeastern
Cameroon in the 2000s: Influence of Cacao Cultivation and Migrants

KITANISHI Koichi

(Received September 28, 2018)

1. はじめに

中部アフリカのコンゴ盆地を中心に広がる熱帯雨林はアマゾン川流域につぐ世界第 2 位の広さを持っており、本稿の調査地であるカメルーン東南部もその一部である。カメルーン東南部の熱帯雨林の現地住民による土地利用は、さまざまなレベルからの影響を受けて変化し続けている。グローバル及び国レベルでは、国際機関、政府、NGO の主導のもとで国立公園の設置や森林を異なった使用カテゴリーに分割するゾーニングが行われている。現在、熱帯雨林の破壊がグローバルな問題として取り上げられている。具体的には森林に蓄えられた温室効果ガスの排出と稀少種の絶滅などの生物多様性の破壊である。カメルーンでは商業伐採と並んで移動耕作（焼畑）が森林破壊の主要な原因とみなされてきた。その森林破壊を防ぐ方策としてゾーニングが行われてきた（Ichikawa, 2012）。これにより、現地の人たちの土地を利用する権利が一部制限されることとなった。

カメルーン東南部の主要な農耕は自給用の焼畑と現金収入のためのカカオ栽培である。そのため、現地住民の土地利用はカカオの国際価格とカメルーン政府のカカオ取引に対する政策の影響を受ける。カカオの国際価格は世界 1、2 位のカカオ生産国であるコートジボアールやガーナのカカオ生産量の変動（及びその予測）に応じて大きく変化するが（ICCO, 2010）、1989年にカメルーン政府はカカオの取引を自由化しており、国際価格の変動が生産者価格の変動に反映されやすい仕組みになっている。この価格の変動に対応して農家はカカオ栽培にどれだけ力点を置くかを変化させている（Ndoye and

Kaimowitz, 2000）。

また、カメルーンは多民族国家で、その中には商売を生業とすることで知られる人たちもいる。彼らは利益をあげる機会を常に狙っていて、そのような機会があると商売を始めたり、時には移住をすることもある。本稿で取り上げるように彼らが実際に現地の土地利用に大きく介入することもある。このような様々なレベルの外部的な要因が熱帯雨林の土地利用に影響を与えている。

本稿で取り扱う調査地には私の他に数名の日本人研究者がさまざまな人類学的調査を行っている。特に本稿で参照したのは大石（2016）である。彼の研究でもカカオ栽培は主要なテーマの一つで、特にカカオ畑の面積やカカオの収量、そこから得られる収入、土地取引の事例など多くの詳細なデータが提示されている。

本稿がこれまでの研究と違うところは、2000年から2010年の間に4回の現地調査を行い、その中で土地利用についてほぼ同じ調査を行ってデータを集めたことである。これらのデータを比較することによって2000年代の10年間の土地利用の変化を詳細に分析できる。また、複数の集落の畑を分析することで、その変化が多様であり、複数の戦略が彼らに存在したことがわかる。

カメルーン東南部のバカおよびバントゥ系農耕民の土地利用については、Hirai（2014）が私たちの調査地から離れた村で1960年代から現在までの変化を追っている。その研究では、焼畑農耕のために必要となる毎年の伐採面積と利用可能な面積から計算すると、ゾーニングで認められた範囲内で持続的な農耕が可能であり、過去50年の間に1次林に焼畑が拡大していないという。こ

* 山口大学国際総合科学部

これは私の調査地の状況とはかなり異なり、私の調査地では2000年から2010年の間にカカオ畑や焼畑の拡大が生じ、新たな一次林の伐採がかなりみられた。このような違いが生じる理由や、調査地での土地利用の持続可能性について考察する。

本稿で利用するデータを集めたもとの動機は、農耕を導入し自身の畑を持つようになった狩猟採集民がどのように農地を保有しているのかを明らかにしたいということであった。狩猟採集民の土地利用の単位は基本的には集団であり、その集団に属しているメンバーならその集団のテリトリーで自由に狩猟採集できる。また、集団のメンバーシップが柔軟で、集団への移入が容易であるため、外からやってきた人でもその集団に加入することでその土地を利用することができた(北西, 2005)。狩猟採集では土地に労働力を投下することはあまりない。だからこそ誰でも容易に土地を利用できたとしても、他人の労働の成果を奪ったり、自身の労働が無駄になることは少ない。一方で、農耕の場合は、森の伐採や植え付け、除草などの労働を投下した場所で他人が収穫をしまうと収穫以前に労働した本人がその労働の成果を得ることができなくなってしまう。これらから土地利用の権利は狩猟採集のテリトリーよりも畑のほうがより個人的にまた厳格になるのではないかと私は予想していた。

しかし、およそ10年間にまたがった調査では土地利用の急激な変化が生じた。これに伴い、バカにとっての土地の価値も大きく変化した。このため狩猟採集から農耕への生業の変化を反映した土地に対する権利の変化といった問題設定で彼らにとっての土地の意味を考えることが難しくなってしまった。そこで、本稿では土地が貨幣と交換可能なものになっていったという点に注目をして、彼らにとっての土地の意味の変化を考えていきたい。

2. カメルーンにおけるカカオの生産者価格の推移

カメルーン東南部では現金収入のためにカカオ栽培が広く行われている。農家のカカオ栽培の動機づけに大きな影響を与えるのは買い付け業者が農家からカカオを買い取る価格(生産者価格)である。そのため、ここでは主としてカメルーンにおけるカカオの生産者価格の変化について特に調査期間に関する部分を中心に紹介する。分析にはFAO (Food and Agriculture Organization of United Nation) やICCO (International Cocoa Organization) の統計資料を用いる。

1960年のカメルーンの独立後、農家の収入源であったコーヒーとカカオの価格の安定のため、政府はカカオ価格安定基金(Cocoa Price Stabilization Fund)と販売組合(marketing cooperatives)を作って農家を保護しようとした。この政策のもとカカオの生産者価格は比較

的高値で安定していた。

しかし、政府の財政悪化と国際価格の下落により1989年に政府はカカオ取引を自由化した(Ndoye & Kaimowitz, 2000)。その結果、生産者価格は1994年まで下がり続けた(FAOSTAT)。1994年の通貨切り下げにより一時的に価格は上昇したものの、そこからは上下を繰り返し、2000~01年には国際価格の下落に伴って生産者価格も下落した(ICCO, 2010)。一方で通貨切り下げによって輸入品の価格が上がり、物価全体も上昇した。例えば、2002年の消費者物価指数は1993年の約1.8倍となっている(IMFウェブサイト)。この時期のカカオの生産者価格は農家にとって厳しいものであったと言える。

2002年から2003年にカカオの国際価格が急騰した。カカオ取引が自由化されていたカメルーンでは、それが生産者価格にすぐに反映された。ICCOのデータでは2000/01年¹⁾のカメルーンの前年比生産者価格が434 CFAフラン/kg²⁾であるのに対して2002/03年には1,023 CFAフラン/kgと2倍以上になった。

2003/2004年に再びカカオの国際価格は下がるが、2006年10月に底を打ち、そこから多少の上下はありつつも2010年まで上昇していく(ICCO, 2012)

2003年以降のカメルーンの前年比生産者価格の動きは国際価格の動きにほぼ一致している。2003/04年には713 CFAフラン/kg、2004/05年は666 CFAフラン/kg、2005/06年と2006/07年は600 CFAフラン/kg程度となった。しかし、2007/08年から上昇して735 CFAフラン/kg、2008/09年には884 CFAフラン/kgとなり、2009/10年には2002/03年を超えて1,147 CFAフラン/kgに達した(ICCO, 2012)。2010年の物価は2003年の1.2倍程度であるので(IMFウェブサイト)、農家にとっては2009/10年には2002/03年と同程度まで価格が上昇したと言えるだろう。

3. 調査地とそこに暮らす人々

(1) カメルーン東南部とバカの歴史的背景

主要な調査対象であるバカ(Baka)はコンゴ盆地に広く分布するピグミー系狩猟採集民の1グループで、カメルーン東南部からコンゴ共和国北西部にかけて居住している。また、カメルーン東南部ではバクウェレ(Bakwele)、コナベンベ(Konabembe)、バンガンドゥ(Bangandou)といった農耕民が近隣に暮らしている。

1950年代以前、バカは主として森の野生動植物に依存して暮らし、森の中で数週間もしくは数か月ごとにキャンプを移動するという生活を送っていた。同時に彼らは特定の近隣の農耕民と経済的・社会的関係を維持していた。バカは獣肉などの森の産物を農作物や鉄製品と交換したり、農作業の手伝いなどをしてきた(Althabe, 1965)。

バカの生業活動は1950年代に急激に変化した。バカは植民地政府の定住化（もしくは再定住化）及び農耕の受容という政策によって、次第に森を出て道路沿いに定住集落を作り始め、一部のバカは農耕民のカカオ畑で働いていた（Althabe, 1965）。

1970年代後半からカメルーン東南部各地で伐採会社の進出が始まった。森に道路が切り開かれ、伐採会社の施設が建設され、さらにそこで働く労働者と彼らに商品を売る商人などが流入して、施設周辺には大きな町ができた。ただし、伐採会社の施設の多くは数年間の操業の後に放棄され、新たな木を求めて次の土地に移動していった。

近年、熱帯雨林の保護に対する関心が高まる中で、地域住民の森林利用についても制限がなされるようになってきている。1999年から2001年の間にWWFやGTZといった自然保護団体や援助機関の支援のもと、カメルーン政府によって、誰がどのように利用できる・できないという土地の区分け（ゾーニング）が計画、実施された。地域住民による農耕と狩猟は、伐採ゾーンとスポーツハンティングゾーン、国立公園では禁止された。地域住民の農耕は非恒久的森林領域に分類された土地だけに許可されており、その土地はおよそ道路の両側3kmの範囲に広がっている（Hirai, 2014）。図1にカメルーン東南部のゾーニングの状況を示した。伐採ゾーンと国立公園が大きな割合を占めていることがわかる。

（2）調査地とその歴史的背景

調査は東部州ブンバ・ンゴゴ（Boumba-Ngoko）県モルンドゥ（Moloundou）郡ドンゴ（Ndongo）村（北緯2度5分東経14度54分）で行われた。村の周辺は深い熱帯雨林となっている。ここでは1年に2回の乾季と2回の雨季がある。12月から2月が大乾季で、3月から5月が小雨季、6月から8月が小乾季、8月から12月が大雨季である（大石, 2016）。

村に住む人たちは10以上の民族に属しているが、彼らは生活様式とエスニックアイデンティティによって大きく3つに分けられる。狩猟採集民であるバカ、バクウェレを中心とする農耕民、ムスリムのハウサ（Hausa）や非ムスリムのバミレケ（Bamileke）などの商人³⁾である（大石, 2016）。1999年頃の人口はバカが250人程度、残りの二つで150人程度で（林, 2000）、2008年ではおよそ300人のバカと250人の農耕民、50人の商人が居住していた（大石, 2016）。2000年代においては3つのグループすべてで人口が増加している。特に2000年代後半は商人の増加が著しい。

現在のバカの食物獲得のための主要な活動は定住集落で行う農耕である。また、定住集落では農耕民や商人の

農作業を手伝い、農耕民からは主に酒、商人からは現金の報酬を受けている。ただし、多くのバカは一時的に森に入り、狩猟採集を行っている。例えば、イルヴィンギア属のナッツが大量に実った時に、バカがそれを採集するために森に滞在することもある。採集したナッツは自家消費されるとともに、売却して収入源ともなっている。

ドンゴ村は1960年代前半にバクウェレの人たちが設立した村である。ドンゴ村は郡の中心であるモルンドゥから西の延びるジャー（Dja）川沿いの道路で最も奥に位置する村である（図1）。バクウェレの人たちがドンゴ村に移住してきた時、バカも彼らと一っしょにやってきた。それ以前、彼らはジャー川に沿ってより小さな集落をいくつも形成していたが、独立したカメルーン政府による定住化・集落集中化政策に従って移住が行われた。バクウェレはジャー川に面したところに集落を作ったが、バカはそこからおよそ2.5km離れたところに集落を形成した。当時のバクウェレにとって主要な交通手段は丸木舟であり、またジャー川での漁撈活動も盛んであった（大石, 2016）。一方でバカは徒歩で移動し、森を主な活動場所としている。

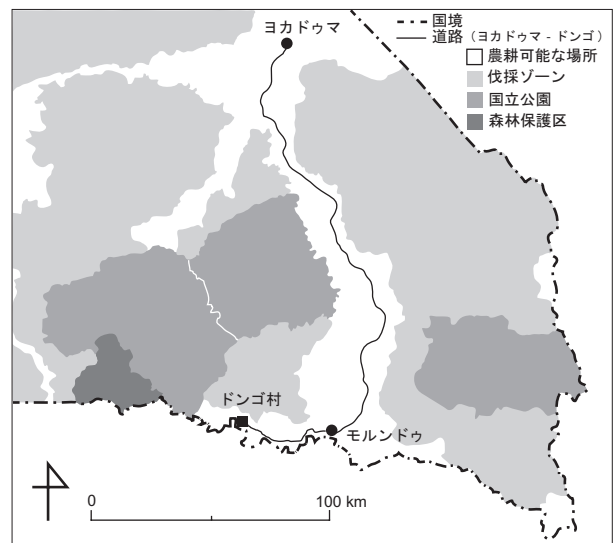


図1. 調査地とカメルーン政府による土地利用の分類
出典：World Resources Institute (2012) ; Hirai (2014)

バカはドンゴ村に移住した時点ですでに主食を確保するための焼畑を行っていた。最も古いカカオ畑が当時集落だった場所の近くに存在しており、大石（2016）のデータを参考にすると、1970年代の前半に数は少ないが彼ら自身でカカオ畑を持ち、カカオ栽培をすでに始めていた。

1970年代後半に木材伐採会社がドンゴ村に進出した。それに伴い、モルンドゥからドンゴ村まで続くトラックが走行可能な道路や橋が建設され、ドンゴ村の交通の便は格段に改善された。木材伐採会社の操業に伴って外部

から多くの人が労働者として移住し、ドンゴ村の人たちも一部雇用された。さらに商人もやってきた。労働者や商人は収入の一部をカカオ畑の購入や拡大に投資した。現在、ドンゴ村で最も大きなカカオ畑を持つハウサの商人はこの時期に移住してきた人である。道路の建設に伴い、バカは集落を道路沿いに移した。そこで彼らはさらに自身の畑でのカカオ栽培を拡大したようである（大石, 2016）。

1980年代前半に木材伐採会社は撤退し、それに伴い労働者や商人の多くは村を離れたが、数人の労働者や商人は村にとどまりカカオ栽培を続けることを選択した（大石, 2016）。この頃は政府によってカカオの価格が高く維持されていた時期であった。

1989年から上述のようにカカオの生産者価格が下落し、1994年の通貨切り下げによって一時的には生産者価格は上昇するものの、物価の上昇も勘案すると、1990年代はカメルーン全体でカカオの生産が停滞していた。ドンゴ村では伐採会社の撤退以降、道路や橋が改修されず、壊れたままになっており、車の通行が困難になった。1999年3月に私が初めてドンゴ村を訪ねたときは、モルンドゥで船外機付き丸木舟をチャーターして7時間かけてジャー川をさかのぼり、村に到達した。交通の便が悪いことで、ドンゴ村にカカオの買い付け人が来るのが制限されたり、運搬費用が余計にかかるため、他の生産地よりもカカオの生産者価格がさらに低くなっていたと思われる。

2000年以降のバカの農耕については後で細かく分析するので、ここではそれ以外の点について述べておく。2000年にドンゴ村を訪れたときは1999年と同様に丸木船で村に入らなければいけなかったが、2004年に訪れたときは交通の便が大きく改善されていた。2001年に木材伐採会社の支援により道路と橋が修繕され、車で直接村に入ることができるようになった。これにより、村の外とのモノや人の行き来が容易になっていた。ただし、2004年ではバミレケなどの非ムスリム商人は一時的に滞在していたかもしれないが、居を構えている人は見られなかった。2007年にはバミレケ商人がかなりみられるようになり、2010年にはさらに商人が増え、バカの集落近くの道路沿いに彼らの家が建てられた。外部からやってきた商人は、外から持ち込んだ商品をドンゴ村の住民に売ることでも利益をあげたが、後で分析するようにカカオ栽培も移住の重要な目的であった。

（3）バカの農耕：焼畑とカカオ栽培

バカは主要なエネルギー源を自身の畑で行う焼畑農耕から得ている。まず、焼畑農耕のプロセスを紹介する。大乾季に1次林もしくは2次林を伐採する。森の伐採は完全

に開けた状態にするのではなく、大木の一部はそのまま残す。大乾季の終わりに乾燥した木や草に火をつける。その前後に作物を植え付ける。除草も行われる。主要な作物は料理用バナナ、キャッサバ、ココヤム (*Xanthosoma* sp.)、トウモロコシで混作される。トウモロコシは3カ月程度、キャッサバ・ココヤムは1年程度、料理用バナナは早い品種で1年、多くの品種で1年半で収穫される。この中で料理用バナナがエネルギー源として突出して重要で、次いでキャッサバ、ココヤムの順に主食として重要であると推測される。畑の除草は次第にされなくなり、2次林が再生され始めるが、暗い中でもある程度成長する料理用バナナがときおり収穫される。放棄された畑は数年から十数年休閑した後で再び伐採されることが多い（Kitanishi, 2003; 大石, 2016）。

この地域におけるカカオ栽培は、従来の焼畑農耕の混作にカカオを組み合わせられて行われている。つまり、大乾季に畑を開き、火入れした後に、上記の作物に加えてカカオの種を蒔く、もしくは苗を植え付ける。畑では料理用バナナが先に成長し、カカオの実生に陰を提供する。カカオの苗木は強い日光のもとでは成長できない。焼畑との違いは、食用作物を収穫した後も除草を続けることである。3、4年後、カカオは若い木に成長し、最初の収穫が可能になる。最終的には畑にカカオの木と最初の伐採のときに残されてカカオの庇陰樹としての役割を果たす大木が残る（大石, 2016; 四方, 2007）。つまり、カカオ畑の最初の段階は主食用の焼畑に小さなカカオが生えている状態であり、その時点ではカカオと料理用バナナを中心とする主食作物は同じ畑に共存している（四方, 2007）。カカオ畑の拡大は一時的には主食作物の栽培の拡大にもつながっている。

焼畑の伐採は男性によって行われるものの、植え付けと収穫は女性によって行われる。一方、カカオ畑の管理はほとんどの場合で男性を中心に行われている。また、そこから得られる収入の管理も男性が行うことが多い。

農耕民の農作業をピグミーが手伝うことは多くのピグミーにおいて知られており、その見返りとしては従来は農作物や酒、タバコなどを得ていた（北西, 2010）。ドンゴ村のバカも農耕民の農作業の手伝いを行っている。ただし、2000年代のドンゴ村では1日の賃金の相場が決まっていて、現金もしくはそれと同価値の農耕民が自身で作る蒸留酒で支払われることが多くなっている。また、その賃金の相場は2000年から2010年にかけて次第に上昇した。2000年頃には1日250 CFAフランだったのが2000年代後半には500 CFAフランになり、2010年のカカオの収穫期には1000 CFAフランになった（大石, 2016）。商人の畑は主としてバカの労働力に依存しており、相場の賃金を現金で支払うことが多い。カカオ畑

の労働では、収穫期でまとめてバカを雇うことがあり、その場合は数万もしくは10数万CFAフランの報酬をまとめて得る。

(4) 畑と森の保有制度

調査地では畑に関わる土地保有のルールもしくは原則が存在する。これはバカ、農耕民に共通である。ただし、実際の土地保有はこのルール通りにいかないこともある。時には利害関係者の認識が異なるために揉め事になることもある。また、法律や政府によるゾーニングなど外部から課せられたルールも存在する。ここでは慣習的なローカルなルールについて紹介する。

土地の利用を決定する基本的なルールは、1次林は誰が伐採しても構わないということと、最初に1次林を伐採して畑を開いた人がその所有者となり、以後の用益権を持つことになるというものである。主食用の焼畑では、収穫後にいったんは森に戻り、また再び伐採することになるが、そこを伐採する権利を持つのが最初に伐採をした人である。実際の2回目、3回目の伐採では、最初の伐採者以外に自身の近親者、特に息子や娘婿がその2次林を伐採することも多い。移住や死亡などで所有者が不在になるとその近親者が用益権を行使することになる。ある時点で見ればその畑の所有者は限定されるが、長期的にみれば何らかのつながりのある親族がその土地を利用していくことになる。

カカオ畑でも、その始まりは焼畑と同じなので最初に畑を開いた人がその所有者となる。一旦カカオが植えつけられると、カカオの木は数十年にわたって存在し続け、所有者も世話を続けるので、カカオを植えて育てた人とその畑はより強く結びつくことになる。所有者が死亡した場合は、焼畑や2次林より厳密に誰がそれを相続するかが決定される傾向にある。

2000年代後半になると、契約に基づいた売却や貸借が盛んに行われるようになった。貸借はlocationという賃貸借を意味するフランス語で表現される。期間は1年が多く、稀に2、3年のこともある。バカがかかわる貸借や売却では、バカの畑を商人もしくは農耕民が借りるもしくは買い取るという形のみで、その逆は見られなかった。カカオ畑の場合、借り手はあらかじめ借り賃を貸し手に払い、労働力を確保して除草や収穫、カカオ豆の乾燥作業を行い、カカオ豆の売却から得たすべての収入を手にする。大石(2016)によると、借り手はかなりの利益を得ているようである。売却においてもカカオ畑が長期的に維持されカカオ豆が収穫され続けるなら、買い手のほうが利益をあげることができる価格になっている。カカオ畑よりは少ないが、1次林や2次林、焼畑も売却されるようになった。これについては後で分析する。

4. 調査期間と調査方法

私は1999年から2010年にかけて5回にわたり合計でおよそ100日間ドンゴ村に滞在した。1999年2～3月、2000年9～10月、2004年2～3月、2007年2～3月、2010年8月である。1999年の最初の滞在では予備的な調査を行った。2000年から2010年までの4回の調査では、バカの集落からバカが畑に行くために利用する小道に沿ってGPSで場所を測定しながら歩き、道の位置を特定するとともに、道の両側の状況を記録した。記録した内容は、その土地の所有者とその境界の位置、利用のされ方である。調査にあたっては、バカの調査助手と歩いた場所付近に畑を持つバカが同行し、彼らから情報を得た。利用のされ方は、森の場合は1次林と2次林、畑の場合は食用作物の焼畑とカカオ畑に分類した。初期のカカオ畑は食用作物とカカオの苗木がともに生育しているが、苗木でもカカオが植わっている限りカカオ畑と分類している。実際に道を歩いて観察していると、2次林と畑、焼畑とカカオ畑の境界は明確ではないが、これも同行したバカの判断に従った。

本稿で用いる畑のデータはこれまで一般的に行われてきたものと異なる。畑の調査では通常は畑の面積を測定する。しかし、今回の調査では一部を除き、畑の面積は測定していない。ドンゴ村のバカ、農耕民、商人のカカオ畑の面積は大石(2016)で紹介されており、収量と関連付けて議論されている。一方で本稿では1次林や2次林を含めた村周辺全体の土地利用の変化を追うことを目的にしている。人工衛星画像を使って利用法を分類することは可能かもしれないが、所有者はわからない。調査者の目で実際に現場で確かめながら所有者を確定して利用の形態を分類しつつ、ある程度広い範囲をカバーするという矛盾した制約を克服するために、このような測定の方法をとった。大石(2016)のデータもところどころ参照しつつ、2000年から2010年の土地利用と所有者の変化を分析していく。

5. 集落、道、畑の位置関係

まず、2000年の状況をもとに、彼らの集落と道、畑の位置関係について説明する。図2はドンゴ村に2000年当時にあった7つのバカの集落のうちの4つの集落(S1～S4)とそこから延びる畑への道(P1～P4)、畑および2次林の所有者が所属するサブグループを示している。ある程度大きな集落であるS1とS4の家の空間配置を見ると、いくつかのグループに分けられる(図3a、3b)。これを本稿ではサブグループと呼び、SG1～6まで番号をつけておく。サブグループはある程度近い親族で構成されることが多い。

狩猟採集民は一般に集団のメンバーシップの流動性

が高いことが知られているが、定住し農耕を行っているバカでもある程度それは当てはまる。1960年代前半にジャー川の上流から移住してきた時には図2の“A”の位置に集落を形成した。1970年代後半にできた道路に沿った場所に居を移したときには、現在のS1とS4の間付近に集落が作られた。その集落はS1とS4に分裂し、新たな移住者を加えていった。さらに、ちょうど2000年の調査をしていた時期にS1のSG2の一部がS3に、SG3の一部がS2に移住し、集落が分裂した。

集落から畑に行くには道を通っていくが、その道沿いに特定のサブグループの畑が存在することが多い。特にS1のSG1とS4のSG5でこれのはっきりしており、彼らの畑は道路からほぼ垂直に森に延びる道に沿って存在する。この2つのサブグループの人たちはこの場所に最初に集

落を建設し畑を開いた人たちおよびその直接的な子孫が多い。“A”へと続く道の途中にSG1とSG5の人の畑が多く見られるのは、自動車道沿いに移住する前に作られた畑や2次林が継承されているためである。サブグループから延びる道と畑の所有者が対応していない例として、SG2から北に延びる道の奥にSG1の畑が存在していることがあげられる。これは図3aでMと示した家に住む人の畑や2次林である。1999年にMの家はすでに2000年と同じ場所にあったが、SG2で最もSG1に近いところにMの壊れた家が存在したことから、Mの家族はSG2からSG1に1999年3月の少し前に移動したと思われる。もともとSG2に属していたMはSG2から延びる道沿いに畑を形成していたために、2000年時点でのサブグループの所属と畑の位置のずれが生じているのである。

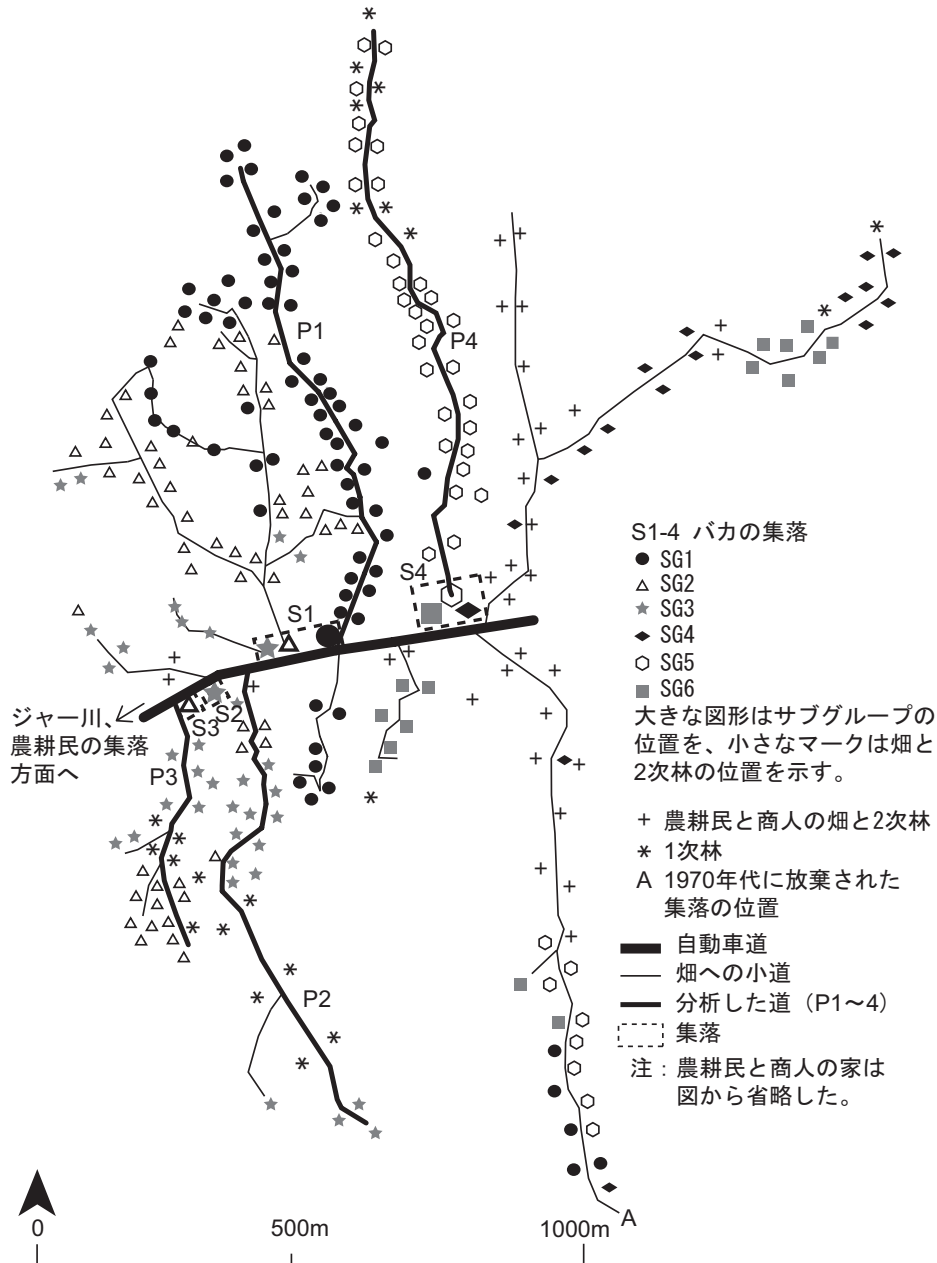


図2. 集落と畑の位置 (2000年)

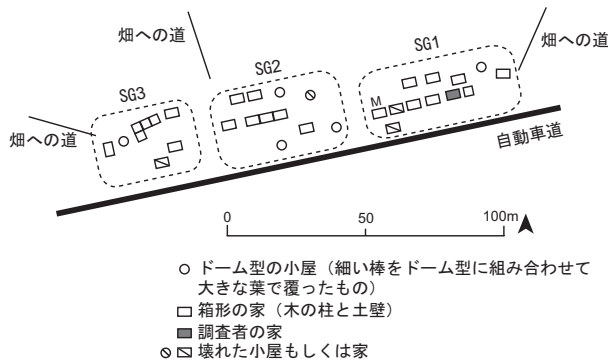


図3a. S1の家の配置図

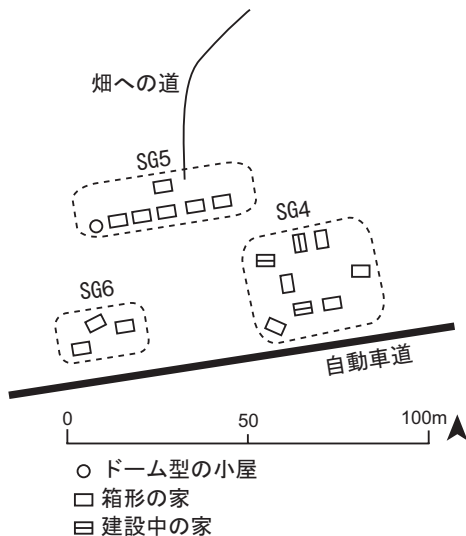


図3b. S4の家の配置図

S2とS3は新たに畑を開いたことに伴って集落が分裂した事例である。2000年の調査期間中に次第にSG2とSG3住民の一部が次第にそれぞれS3とS2に移動していった⁴⁾。S1から北に延びる道沿いにもS2やS3に移動した人たちの畑や2次林が存在する。S2から延びるP2とS3から延びるP3沿いの畑や2次林の所有者を見ると、P2のS2に近いところの畑がSG2の畑で、P3のS3に近いところの畑がSG3の畑となっており、集落のメンバーと畑の所有者が一致しない。一方、道の奥では集落のメンバーと畑の所有者が一致している。彼らは一般的には道路に近いところから畑を開いていくが、最初はP2はSG2、P3はSG3の人たちが開いたのだけれども、途中で入れ替わり、2000年の段階で主にP2を利用しているのがSG3の人で、P3を利用しているのがSG2の人であったため、そのような集落、道、畑と2次林の配置になったと思われる。

S4のSG4とSG6の人たちは集落から少し離れたところに畑を開いている。これはすでにS4のまわりではSG5や農耕民、商人が畑を開いていて、集落の近くに土地がなかったためである。

このように、原則的には新たに道路沿いに集落を形成したときに自動車道から垂直方向に畑を作っていくが、時間が経つにつれ、移入や移出が起きたり、土地が足りなくなったりすることで、畑と集落の位置関係は次第にランダムなものになっていく。定住化し農耕を導入したとはいえ、狩猟採集民の集団のメンバーシップの柔軟性の高さが畑の配置にも影響を与えている。

土地利用の変化については、これから道ごとに分析するが、P1とP4ではSG1及びSG5の畑とかなり対応している。また、P2とP3については、SG2とSG3の畑が混ざっているが、2000年代後半には自動車道近くの畑の多くが他民族に対して売却され、また道が奥に延びて新たに畑が作られることで、他民族のものを除くとP2はSG3、P3はSG2の畑や二次林が大部分を占めるようになっていった。このように道により程度の違いはあるものの、道沿いの畑の所有者とサブグループには対応関係がある。

6. 土地利用の変化

図4a～4dは2000年、2004年、2007年、2010年のP1～P4に沿った土地利用を示したものである。ここではこれらの図に基づいて分析する。まずは、4つの道沿いの畑を年ごとに見ていく。

2000年のパカの土地利用の特徴は自給用の主食作物の焼畑が多くを占めていることである。また、ほとんどがパカの保有する畑となっている。これは90年代のカカオの価格の低迷とドンゴ村の自動車の交通の途絶の影響によってカカオ栽培が低調であったことが理由と思われる。

2004年では、ほとんどがパカが保有する畑であることについては変化がないものの、焼畑が減少する一方でカカオ畑が増えている。また、P1とP2では道が奥に延びており、P2とP3では道の途中で一次林であった場所が新たに畑として開かれている。2003年の世界的なカカオの価格の高騰と自動車道の改修によってドンゴ村でのカカオの取引価格が急上昇したことが、パカにとってカカオ栽培のインセンティブになったと思われる。この時点では焼畑の減少が彼らの主食作物の供給不足を引き起こしたとは考えられない。それは新たに作られた若いカカオ畑には主食作物も栽培されているためである。また、パカ以外の人によるこれらの道沿いの土地の利用もほとんど見られない。

2007年にはパカの土地の賃貸と売却が広まっており、パカ自身が栽培する土地はかなり減少した。ただし、4つの道沿いでどれくらいの土地が売却または賃貸されたかは異なる。P1とP4ではカカオ畑の賃貸が広がっているが、P2とP3では売却のほうが多い。またP2とP4では焼畑がかなり少なくなっており、この道沿いの畑から

十分な自給用作物が確保できたかは疑問である。バカの畑の賃貸と売却を促したのは、新たにドンゴ村にやってきた商人たちである。彼らは村で商売をするだけでなく、カカオ畑を賃貸・購入し、そこで収穫されるカカオの販売によって投入した資金を超える利益を得ようとしていた。このような商人の働きかけに対して多くのバカが応じたのである。

2010年には、賃貸と売却の割合は4つの事例で違いがみられるものの、バカ以外が利用する農地がさらに増加するという状況であった。P1では2007年には畑の賃貸が多かったが2010年には売却が進んでいる。これはカカオ畑の賃貸でトラブルが起きたため、賃貸をやめて売却をしてしまったということであった。

P4では2010年にはほとんどの畑が売却もしくは貸し出され、バカが利用する畑はほとんどなくなった。この道沿いの畑から十分な食料供給を得ることは難しかっただろう。実際、P4を利用する人たちが住むS4はバカの人口が減少し、外部から来た商人の家が立ち並ぶようになり、バカの集落としては消滅寸前であった。

ここまで2000年から2010年までの変化を追ってきたが、次に4つの道沿いの畑それぞれの特徴を見ていこう。

P4沿いには1970年代後半から畑が存在し、時間をかけてカカオ畑を形成していった。図4を比較すると、2000年段階で既に他に比べて多くのカカオ畑が存在したことがわかる。2007年の段階ではそれが商人の関心を引くことになり、多くのカカオ畑が売却・賃貸された。一方で2000年の調査時にS4の中心的人物（バカ語でkokoma）だった人は人望があったが、彼は次第に体が弱り、2010年の調査時にはすでに亡くなっていた。このような事情も集団の求心力の低下に影響を与えた可能性がある。

S4の人たちは土地の売却や賃貸で一時的に現金収入を得たが、それを使い切ると困窮するという状況にあったわけではない。現金収入は商人のカカオ畑における賃労働である程度得ることができただろう。また、食料の確保に関しては、他の集落に移住するなど対応できる。このように、集落の衰退を生活の危機と捉えるのは適切ではないだろう。狩猟採集民のメンバーシップの柔軟性に

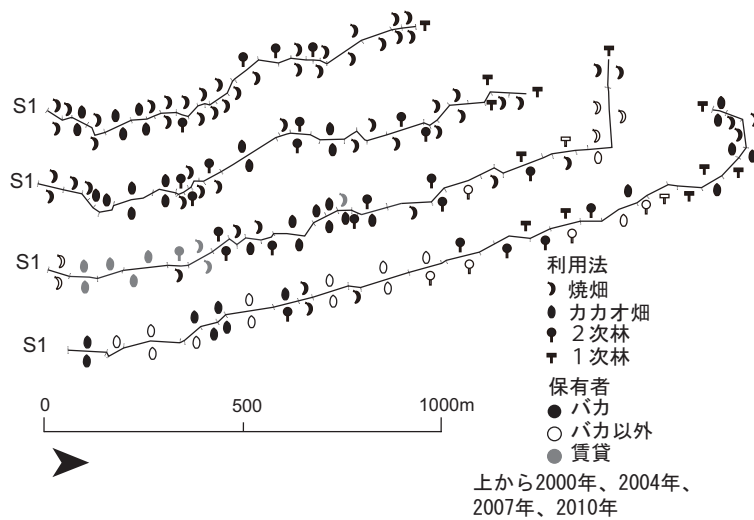


図4a. P1沿いの土地利用の変化

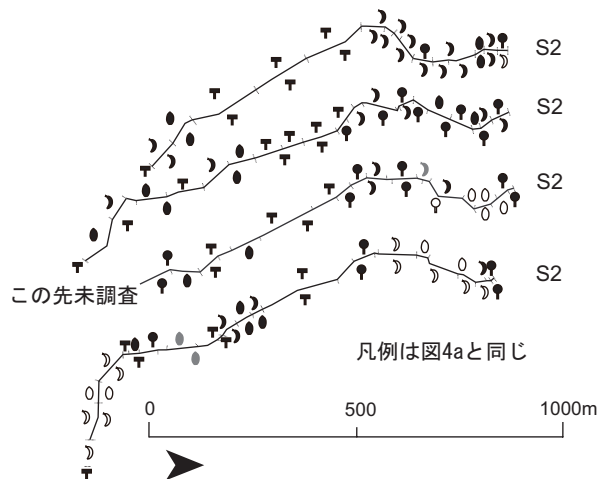


図4b. P2沿いの土地利用の変化

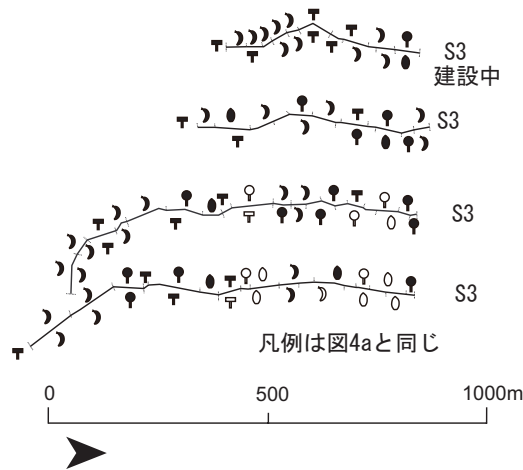


図4c. P3沿いの土地利用の変化

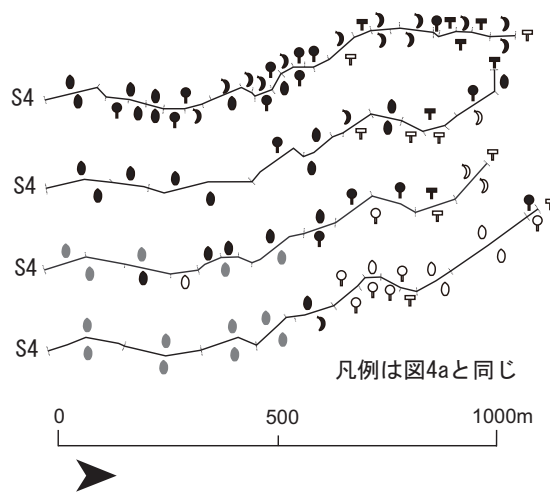


図4d. P4沿いの土地利用の変化

よる適応能力も土地の売却を容易にしていると思われる。

一方で同じように以前からカカオ畑が存在したP1でもカカオ畑を賃貸・売却しているが、SG1が利用する畑の大きさにはあまり変化はなかったようである。彼らは道を森の奥に延長し、畑を広げたためである。自身の畑を次々と手放していることについて彼らと話をしたとき、「森がある。また森を切って畑にすればいい。」と述べていた。2010年には彼らの一部が奥の方に出作り小屋を作り、そこで生活をしてきた。自動車道沿いには商人がバーを開くなどしてにぎやかになっているが、その一方でトラブルも生じている。彼らはそれを避けているように見えた。奥にある粗末な小屋に住みつつも、主食作物もカカオも栽培し、地味ながらも堅実な生活をおくっているようであった。

P2沿いの畑は2010年にはP4ほど極端ではないものの、かなりの土地をバカ以外が利用するようになった。一方でP3沿いの畑は土地を売却しつつも奥に畑を広げて自身の畑をある程度確保しており、P1の状況に近い。

4つの道沿いの畑の10年間の変化には共通する部分

がある一方で、違いもある。それはカカオ畑や現金収入に対する考え方、商品経済への関わりや度合い、商人や農耕民との距離の取り方などがバカの間で異なっていることが理由ではないかと推測される。

7. 土地の価値の変化

土地の価値、貨幣との交換可能性について大きな変化がみられるのは2000年代後半の商人の移入者が急増してからである。ここではまず、それ以前の土地のあり方について述べ、その次に2000年代後半の変化について説明したい。

まず、2000年代前半まで、先に述べたように1次林は基本的に誰でも自由に伐採できる場所であった。この地域は人口密度が低く、自動車道から離れた場所には1次林が多く残されていた。しかし、実際に焼畑のために1次林を伐採するバカはそれほど多くはなく、集落から比較的近い2次林を間隔をおいて伐採することが多かった。これらのことから1次林が稀少価値を持っていたとは思われない。ただし、原則は自由に伐採できるものの、

ある人の畑に隣接している1次林を伐採する場合はその畑の持ち主に無断で伐採することはなく、了解をとっていたようである。

2次林は1次林と同様に現金で取引されることはなかった。バカにとって2次林は時期が来たらもう一度伐開して畑にすること以外の価値は持っていなかった。バカにとっては土地よりも森を伐開する労働力が不足していたと思われる。誰か他の人が伐開して焼畑を作り、そこで収穫される作物の一部を得られるなら喜んで利用させていた。自身の2次林を兄弟や息子などの近親の男性が伐開することはよく見られた。また、娘の夫が妻方居住をしている場合には積極的に娘婿に自身の2次林を提供して畑を開いてもらい、そこでとれた農作物や娘が調理したバナナをもらっていた。

2次林の保有の境界は明確ではないこともある。例えば、P4沿いに2000年の段階ではあるバカの2次林とされた場所が2004年では農耕民の焼畑になっている部分があった(図4d参照)。これはバカが2次林を譲ったもしくは売却したわけではなく、別方向から延びてきた農耕民の畑がP4まで到達したためである。また、2000年には集落S2の近くに農耕民の焼畑があるが(図4b参照)、これはS2のバカがここに集落や畑を形成する前から存在したものである。この畑が2004年にはS2のバカの2次林として認識されている。これは明確に譲渡がなされたわけではないが、バカが頻繁にこのあたりを利用することで農耕民の足が遠のき、結局バカが利用するようになっていった。このように、2次林の保有についてはかなりあいまいな点が存在していたことがわかる。

焼畑でも2次林と同様に売買は見られなかった。遠くの村へ移住するなどして保有者がいなくなった場合は近親者がその畑を利用していた。

カカオ畑は2000年以前から売却されるケースが見られた。売買の方向はバカが売って商人が買うというものである。伐採会社が進出していたところにやってきた商人の中にバカのカカオ畑を購入する人も存在した。このカカオ畑の売買は土地の売買というよりも植わっているカカオの木を購入するという意識が強かったかもしれない。現金収入源となるカカオの実を生み出すカカオの木に対してお金を払うということに違和感はなかったかもしれない。

2007年と2010年の調査時には商人によるバカのカカオ畑の購入と賃借は広く見られた。カカオ畑が貨幣で購入できるものであるというのはそれ以前と違いはない。賃借は新たに外部から入ってきた仕組みである。この賃借がlocationというフランス語で表現されていることから、もともと存在しない仕組みであったことがわかる。

2007年には、カカオ畑に比べて数は少ないものの、バカの2次林の商人への売却が見られた。一方で、同じ

道沿いで無償での2次林の商人への譲渡も見られている。この時点では2次林が貨幣と交換されるものなのかは明確ではなかったのかもしれない。2次林を伐採してカカオを植えることを前提とすれば、それが現金収入を生み出すことが期待されるので、商人としてはお金を払ってでも2次林を手に入れたと考えようになってきたのだろう。2010年では2次林の売買は2007年に比べると増えている。ただし、カカオ畑の事例に比べるとかなり少ない。少しずつではあるが、2次林が商品価値を持つものになっていっているようである。

2007年にはバカの2次林や焼畑の農耕民への賃借がわずかに見られた。これは農耕民が主として落花生を植えるために借りたもので、落花生の収穫後はバカに返却される。落花生は農耕民にとって自家消費に加えて現金収入源となっており、借りた農耕民は賃料を払っても利益が出ると判断したのだろう。

2007年の調査ではバカの1次林を商人に無償で譲渡したという話を聞くことがあった。1次林は原則として誰のものでもなく、自由に伐採できるはずで、譲渡という表現はこれに矛盾する。ただし、畑に隣接する1次林はその畑の持ち主が伐採を計画していて、他のバカも暗黙の了解としてそれを認めていることがあり、そのような1次林はその人の1次林と表現されることがある。その森を商人が伐採することを認めてもらったということである。この1次林を手に入れた商人はその森を伐開して料理用バナナやトウモロコシに加えてカカオを植えた。また、1例ではあるが農耕民がバカの1次林を購入したという事例もあった。値段はカカオ畑の売買や賃借で支払われる金額と比較すると1、2ケタ少ない程度の額であった。2010年にもバカの1次林の商人への売却の話があった。この時のバカの説明では、その1次林を切るという考えをもともと持っている人がいるのなら、その人からその森をもらう必要があると言っており、1次林は誰でも伐採してもいいという考え方が変化を始めていた。ただし、商人はまだお金を支払っていないとのことだった。

なお、1次林や2次林の売却価格であるが、当事者が価格を明かしたがいなかったため不明な場合が多い。とはいえ、カカオ畑の売却額よりもかなり安いということはバカの中での共通認識ではあった。

8. 考察

(1) 商人はなぜカカオ畑を購入・賃借し、バカは畑を売却・賃借したのか？

カメルーン東南部の農村で2000年代に外部から来た商人がこれほどカカオ畑を購入・賃借したのはドンゴ村特有の現象であり、他ではカカオ畑の一時的な拡大がみ

られる程度である（例えばHirai, 2014）。

ドンゴ村で商人によるカカオ畑の売買や賃借が広く見られたのはいくつかの要因が重なったためであると考えられる。ドンゴ村には伐採会社の進出時頃にやってきて村で最も広いカカオ畑を所有し多くのバカを雇用しているハウサの商人がいる。彼は長年バカの労働者と良好な関係を築き、彼のもとで働いたバカは優秀なカカオ畑労働者として育っていった（大石, 2016）。この点はカメルーン東南部の他の村とかなり異なる点である。これらのカカオ栽培の技術を身につけたバカの中には自身で畑を開いた人もいた。また、2000年代はそれ以前の時期に比べてカカオの生産者価格が高かった。さらに、バカの賃金は農耕民と比べて安かった。技術を持った安価な労働力、購入や賃借可能なカカオ畑や森、高値のカカオの生産者価格といった条件が整ったところに資金を持った商人が進出してきたのである。

一方でバカはなぜ彼らのカカオ畑を売却・賃借してしまったのだろうか。カカオ畑を自身で維持・管理していけば、長期的に見れば売却や賃借したときよりも多くの現金収入が得られたはずである。そうでなければ、利益を求める商人たちは購入や賃借をしないだろう。大石（2016）によると、2009/10カカオシーズンにおいてドンゴ村のカカオの生産者価格は1200 CFAフラン/kg、1 ha当たりのカカオの平均収量が383 kg、彼らのカカオ畑の平均面積が0.8 haであることから、平均367,680 FCFAの粗収入を得ることができる。私が聞いた話では、1年間の賃借の値段は通常は数万FCFA、大きなもので十数万FCFAであることが多い。必要経費を差し引いたとしても自分で農作業したほうが多くの収入を望めそうである。

大石（2016）は即自的な収入と消費を好むバカの生活態度にその理由を求めている。カカオ畑を所有していてもすぐに収入にはつながらず、除草、収穫、種子の乾燥、豆の売却をすることで初めて現金を手に入れることができる。賃借や売却では金額は少なくなるかもしれないが、即座にお金を手に入れることが可能である。さらにバカが村を長期間離れるときに、賃借することで他人に畑の管理を任せられるとともに、少ないかもしれないが収入を得ることができる。一部のバカは長期的・継続的な維持・管理を面倒だと考えている。また、カカオ畑を賃借・売却しても、他人のカカオ畑で日雇いで働けば、その日に収入を得ることはできる。

彼らが簡単に畑を賃借・売却してしまう理由は彼らの土地に対する考え方も関係していると思われる。上記のように、畑を売却してもまた新たに森を伐開すればいいと考えている。彼らは森を無限に広がっていると感じていて、森に稀少性を認めていないのだろう。

バカにカカオ畑の売却や賃借の理由を尋ねると、明確な理由がないことも多いが、理由として挙げられたのは、カカオ畑の持ち主もしくは家族が病気になる、病院の費用を捻出しなければいけなくなったというものである。道路が開通し、ブッシュタクシーが定期的に村までやってくるようになると、重病人が町の病院に行くことができるようになった。健康保険とは無縁な彼らの病院の費用はすべて自己負担である。もともと現金を手に入れたとしても即座に消費する傾向のある彼らは貯蓄がないことが多く、高額な病院の費用を家族でねん出することが難しい。そのため、カカオ畑の賃借や売却によってまとまった現金を手に入れてそれに充てている。このように、カカオ畑の売却や賃借はバカにとって生活の助けになることもあるが、価格という面ではバカに不利になっている。

狩猟採集を主な生業としていたとき、彼らの食料確保にとって重要であったのは、土地や狩猟採集の道具よりも、いっしょに狩猟採集を行い、獲得した食物を分配しあう共に暮らす人たちであった。土地は集団で共有され、また集団のメンバーシップが柔軟であるため他の集団への加入も容易であり、土地へのアクセスへの障害は少なかった。彼らの狩猟採集に使う道具は短期間で使い捨てにするものが多く、長期的に継続して使用されるのは槍の穂先や斧の刃といった鉄製品くらいに過ぎない。土地や道具よりも人間そのものが重要であるという狩猟採集の生業のあり方が、病気の時の対応にも影響を与えているのかもしれない。

（2）畑は拡大し続けるのか？

本稿では特に4つの道のまわりの畑について分析したが、2000年から2010年の10年間で道の長さが2倍程度になったものが2つ、ほぼ同じものが残り2つであった。他のバカの集落では東の方角にも新たに畑を広げている人たちもいて、ドンゴ村全体としても2000年代において畑や2次林となっている面積はかなり増えていると推定される。カメルーン政府による土地利用のゾーニングでは道からおよそ3kmのところまで農耕が可能とされているが、P1の長さは直線距離で2km弱で、このまま拡大を続けると将来的には農耕が許可されている地域からはみ出すかもしれない。P2とP3は延びていくとドンゴ村の農耕民や他の村の人たちの畑、ジャー川にぶつかることになる。P4が延伸されなかったのは他の人たちの土地とぶつかったことも一因である。

2010年の時点でドンゴ村のバカは1次林が足りなくなるという認識を持っていないが、10年間で起きたような急激な拡大が今後も続くとしたら、政府のゾーニングを無視しない限り土地が足りなくなるかもしれない。問題はこのような急激な土地利用の拡大が継続するかである。

現在の人口の規模と現在利用できる土地の範囲という条件なら、この地に暮らす人たちの食糧を供給するだけであれば、十分な休閑期間を伴う焼畑によって持続的に可能である。そのため土地利用の持続可能性はカカオ畑がどれだけ拡大するかということにかかっている。

Hirai (2014) はカメルーン東南部のグリベ村での土地利用について分析している。そこではバカの畑は1990年代後半から2000年代前半に急激に増えてはいるものの、1990年代後半から2013年まで畑の範囲は変わっていない。畑のために毎年伐採する面積の150倍程度の利用可能な森が存在し、2次林を伐採することで持続的な農耕が行われている。グリベ村ではカカオ価格が上昇した2003年にカカオ畑拡大のピークがあり、それ以降のカカオ畑の拡大が見られなかった。

ドンゴ村とグリベ村の違いは、安くて良質なバカの労働力の有無だと思われる。さらに、ドンゴ村にはすでにカカオ栽培で成功しているムスリムの商人が存在したことも重要である。彼をロールモデルとして商人がやってきて、バカの畑を購入・賃貸し、バカを雇ってカカオ栽培を拡大させた。

ドンゴ村で見られたカカオ畑の拡大が今後も続くにはいくつか条件があるだろう。一つは現地でのカカオの生産者価格がある程度の高さを維持することである。これについては現地の直接のデータはないものの、2017年までの国際取引価格を見ると、全般的には高値を維持もしくはさらに高騰している（ICCO, Statistics, Cocoa Prices）、調査地でのカカオ価格の高値が続いていることが予想される。

調査地でのカカオ畑の拡大でもっともありそうな制限要因は安くて良質な労働力の利用可能性である。ドンゴ村の商人のカカオ畑の労働力はこの地域のバカが担ってきた。大石 (2016) によれば、商人は農耕民のほうが賃金が高いうえに文句ばかり言っていて働かないと考えていて、バカの雇用を好んでいるという。

2000年代、ドンゴ村ではバカの労働力は次第に稀少なものになっていったようである。バカの一当たりの労賃は2000年から2010年の10年間で4倍になった（大石, 2016）、カメルーンの消費者物価指数は1.28倍になったに過ぎない（IMFウェブサイト）。1999年から2008年の間にバカの人口は250人から300人に増加したが、その程度の人口増加では急激に拡大したカカオ栽培に対応できず、労賃の上昇が生じたと思われる。2010年の調査時には、農耕民が朝にバカの集落にやってきて執拗にバカに畑で働くように呼びかけていたが、それを避けようとするバカもいた。安くて良質な労働力の確保は次第に難しくなっていったようであり、これがカカオ畑拡大の制限要因となりそうである。

このように、2000年代に起きた急激な畑の拡大が継続していくかは疑問であるが、政府のゾーニングも考慮に入れながら、彼らの土地利用を今後とも注視していく必要があるだろう。

(3) 土地の価値の変化

ドンゴ村では2000年代後半において1次林、2次林の価値が変化した。具体的には貨幣との交換可能性が生まれたのである。これは外部からやってきた商人の影響が大きい。そもそも商人は、モノやサービスと貨幣との交換を繰り返す中で利益をあげていく存在である。バカの森や労働力を購入し、カカオを栽培することで利益が出ると予想がついたので、そのような選択をしたのだろう。その条件については前述した。バカはその点で受け身であった。外部の人に対して受け身であるのはピグミー系狩猟採集民全般に見られる特徴であると思われる（北西, 2010）。

とはいえ、1次林や2次林の価値の変化は順調に進んでいったわけではない。2007年から2010年は価値観の変化の途中の段階であり、森は売却するものか無償で譲渡するものか、さらに売却するにしても値段の相場がどれくらいなのか確立していたわけではない。

その中で、土地の売買や賃貸を巡る揉め事も頻発している。具体的な事例は大石 (2016) に紹介されているが、土地の保有者が不在の間に親族が勝手に土地を商人に売ったり賃貸して現金を得る一方で、本来の保有者の取り分が全くない、もしくは得られたとしてもごくわずかにすぎないといったことが見られた。2000年代前半までの2次林もしくは焼畑は長期的に見れば個人というよりも何らかのつながりのある親族が利用していくものであったが、このような紛争が続くことになれば、紛争を避けるためにより土地の保有者を特定の個人として明確にしていく方向に進んでいく可能性がある。2010年には、もともとはバカが集落を形成していた道路沿いの土地が、商人が住居を立てるために高額で取引されるようになっていた。その土地が誰のものかということを明確にするために、あるバカは自分の名前を小さな板に書いてそれに棒をつけてプラカード状のもの作り、地面に刺していた。

このように土地の保有の状況が急激に変化をしていく中で、ドンゴのバカもしくはドンゴ村の人たち全体で土地の取引に関する共通のルールが作りだせてはいない、もしくはそのようなルールができたとしてもそれを守ろうという意識が希薄のように思われる。

さらに、土地取引についてはドンゴ村の中だけではなく、さまざまなレベルの地方政治権力がかかわっていることも事態を複雑にしている。ドンゴ村のバカの畑がか

かわるものでドンゴ村を越えた政治権力がかわった事例はまだわずかであるが（実際の事例は大石（2016）を参照）、バカもそのような権力を意識することに次第になっていくのだろう。ドンゴ村での土地取引には混乱が見られるが、取引が繰り返されていく中で、さらに紛争が生じ、そして解決されていく中で、いつかはルールが確立されるかもしれない。ただ、しばらくは混乱が続くと思われる。

謝辞 本研究はJSPS科研費JP12371004, JP14401013, JP17251002, JP21241057の助成を受けたものである。ドンゴ村の人々には調査において多大なご協力をいただいた。また、ここでは名前をあげないが、多数のカメルーン研究関係者およびカメルーン政府関係者にお世話になった。ここに感謝したい。

注

- 1 : ICCOはカカオに関するの統計を主要産地である西・中部アフリカのカカオの収穫期に合わせて10月に始まり9月に終わるcocoa yearで発表しており、2000/01年とは2000年10月から2001年9月までの1年間を指す。
- 2 : CFAフランとはカメルーンを含む中部アフリカ6カ国共通の通貨で1ユーロ = 655.957 CFAフランの固定相場になっている。
- 3 : ドンゴ村でハウサと呼ばれる人たちはイスラームを信仰するカメルーン北部や西アフリカのサヘル地域の出身者のハウサ以外の民族も含まれる（大石, 2016）。本稿ではドンゴ村での一般的な呼称に従ってすべてハウサとしておく。
- 4 : 調査期間中に移動が生じており、居住するメンバーが確定できなかったため、図2ではS2, 3に住む人もサブグループとしてはS1のSG2, 3と同じ記号で表記している。

参考文献

Althabe, G. 1965. Changements sociaux chez les Pygmées Baka de l'est Cameroun. *Cahiers d'Études Africaines* 5 (20) : 561 - 592.

林耕次 2000. 「カメルーン南東部バカ (Baka) の狩猟採集活動—その実態と今日的意義—」『人間文化』14: 27-38.

Hirai, M. 2014. Agricultural land use, collection and sales of Non-Timber Forest Products in the agroforest zone in southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 49: 169 - 202.

Ichikawa, M. 2012. Central African forests as hunter-gatherers' living environment : An approach to

historical ecology. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 43: 3 - 14.

- Kitanishi, K. 2003. Cultivation by the Baka hunter-gatherers in the tropical rain forest of central Africa. *African Study Monographs*, Supplementary Issue 28: 143 - 157.
- 北西功一 2005. 「狩猟採集民における土地保有と農耕化に伴うその変化：アフリカ熱帯雨林に居住するバカ・ピグミーの事例から」『研究集報：特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の連関を通して—」“自然資源の認知と加工”研究班報告』12: 11 - 25.
- 北西功一 2010. 「アフリカ熱帯林の社会（2）—ピグミーと農耕民の関係—」『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史』（木村大治・北西功一編）京都大学学術出版会, pp.21 - 46.
- Ndoye, O. and D. Kaimowitz 2000. Macro-economics, markets and the humid forests of Cameroon, 1967-1997. *The Journal of Modern African Studies* 38 (2) : 225 - 253.
- 大石高典 2016. 『民族境界の歴史人類学—カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民』京都大学学術出版会.
- 四方篤 2007. 「伐らない焼畑—カメルーン東南部の熱帯雨林帯におけるカカオ栽培の受容にみられる変化と持続—」『アジア・アフリカ地域研究』6 (2) : 257 - 278.

ウェブサイト (2018年2月24日閲覧)

FAOSTAT. <http://www.fao.org/faostat/en/>

ICCO, Statistics, Cocoa Prices. <https://www.icco.org/statistics/cocoa-prices/monthly-averages.html>

ICCO 2010. The World Cocoa Economy: Past and Present. https://www.icco.org/about-us/international-cocoa-agreements/doc_download/161-the-world-cocoa-economy-past-and-present-30-july-2010.html

ICCO 2012. The World Cocoa Economy: Past and Present. https://www.icco.org/about-us/international-cocoa-agreements/doc_download/442-the-world-cocoa-economy-past-and-present-26-july-2012.html

IMF, Cameroon: Inflation, average consumer price (Index) . <https://www.imf.org/external/pubs/ft/weo/2017/01/weodata/weoselsr.aspx?c=622&s=PCPI>

World Resources Institute 2012. *Atlas Forestier Interactif du Cameroun*. Version 3.0. http://data.wri.org/forest_atlas/cmr/report/cmr_atlas_v3_fr.pdf